

なぜPFIで安くなる？

不燃ゴミ処理を民間企業にお任せでいいのか

9月議会一般質問で私は、不燃物リサイクルセンター・埋立て処分地の第2期計画を、PFIという手法で、民間企業・ゼネコンにすべて任せることについて、その是非を議論しました。

ゴミ処理は自治体が責任を持って行なう重要な仕事のひとつで、一日たりともストップ出来ない業務です。それを計画から建設、そして運転・管理まで一括して、すべて特定のゼネコンに渡してしまう、市は20年ほどの期間、カネを払うだけで良い、というのがPFIです。私は、市の中にゴミ処理の専門知識を持った職員がいなくなってもいいのか、本当に民間に任せた方が安くあがるのか、について質問しました。

説明なしに「削減期待値」20%あると言うだけ

PFIが有利だとしたコンサルタントの報告を見ると、市が行なう従来手法では総事業費負担が114億5070万円、PFI方式だと100億6916万円となり、その差額で14億円ほど安くなるとされています。

これはどんな計算の積み上げなのかと読んでいくと、いきなり「削減期待値を20%に設定する」として、建設工事費51億円から20%引いて40億8千万円と書いてあります。ところが、どこを読んでも「削減期待値20%」の説明はありません。なぜ20%なのかを聞くと、「よその事例で、20%ほどになっているから」という、あやふやな答弁でした。

何の論証もなしに「民間にすれば2割安くなる」というだけでは、納得がいきません。私は「市庁舎建設は従来手法で10%以上、13億円も費用をへらした立派な実例があるではないか。民間にすれば安くなると単純に言うのはおかしい」とただしました。これから来年にかけて、PFIの具体的な作業が進められますが、注目していきたいと思います。

公民館への「配本サービス」考え直せ

市立図書館は10月で移動図書館車を廃止し、その代わり11月から31ヵ所の公民館などに図書の「配本サービス」事業を行なうとしています。

私は9月11日の本会議一般質問で、拙速なやり方をやめるよう求めました。移動図書館は3000冊の本を載せ、その構成も工夫してきましたが、今度の「配本サービス」は各公民館にそれぞれ1000冊の本を置くだけ、月に1回程度、軽自動車1台による巡回で本の入れ替えをする、というものです。私は、合計3万冊以上もの品揃えや管理はムリ、準備期間もない、特別な職員体制も予算もない、それどころか今年は1千万円も図書購入予算を削られていて、サービスを充実する意欲も姿勢もない、こんな中で安直に新しいことは始めない方がいい、と忠告しました。

それでも文化振興部長は、予定通りすすめる、目標は移動図書館の過去最高・年間貸出冊数約7万冊とすると答えました。市民の声も聞かずに、市民の望まないことを始めても、失敗することは目に見えています。

移動図書館、最後の10月「回るだけで貸さない」

これが最後の巡回となる10月の移動図書館、ところが市広報には「回収だけ」として、図書の貸出しをしないと書いてあります。いったい何のために大きなバスで回るのか？本も積まずに回収だけとは、あまりにもオソマツです。返すだけのために、利用者に出て来いというのです。

私は文化振興部長に「エイデンもミドリ電気も、閉店大セールをしているのに、移動図書館は安楽死か。最後に利用者の皆さんに、感謝の特別サービスをするのが本当ではないか」と、きびしく抗議しました。

農業切捨てで、喜べない「収穫の秋」

今年の稲作は平年並みだそうですが、わが家の1反の田んぼは昨年より多い7俵の収穫でした。うちは自家消費だけだからいいのですが、たくさん作っているコメ農家は、また米価が下がってとても採算が合いません。転作の助成もなくなって、もうコメを作るなど言わんばかりです。周辺の農地でも、高齢化や後継者がいないなどで、耕作をやめる所、荒らしている所が目立ってきました。自民党の農業切捨て政策が、地域を荒廃させています。

昨年度繰越金ほとんど道路改良費に

9月補正予算に、昨年度の黒字剰余金約5億円のうち2億2351万円が、歳入の「繰越金」として計上されました。しかし、使う方の歳出を見ると、土木費の「道路新設改良費」に1億9500万円と、繰越金はまるまる道路予算に充当されたこととなります。

私は9月議会最終日の討論の中で、「生活道路の整備は必要だし、進めなければならないが、しかしいま特に障害者や高齢者の皆さんが、改悪介護保険や改悪障害者自立支援法によって、その影響をまともに受け悲鳴が上がっている現状などに、予算上何の配慮もされていないことに、川岸市長の姿勢をうたがう」と述べ、福祉への予算措置を求めました。

「学校外部評価」、市内10校で始める

安倍新首相が、いちばん力を入れようとしているのが、教育基本法の改悪とともに、学校評価の導入です。これは単なる評価ではなく、学校現場に競争原理を持ち込み、学力テストや教員評価の導入とともに「格差」や「競争」をさらに進める危険な意図があります。

こんな時に鈴鹿市教育委員会は、国からの予算520万円を受けて、小学校8校、中学校2校で「学校評価システム」の調査研究を始めます。補正予算審議の中で、取り組むのは全国でわずか122校、三重県では鈴鹿市の10校だけということが明らかにされました。私は、いま教育現場ではやるべきことが山積しているのに手をつけず、県内でも鈴鹿市だけが突出して学校評価を持ち込むことは問題だと、この予算については反対しました。

水道工事入札、落札率が上昇傾向に

近ごろ工事入札の落札比率が、大きな工事ほど高くなっています。「談合」の疑いも考えられます。この表は、水道会計の決算審議で出された数値です。

水道工事	2003年度	2004年度	2005年度
2000万円以上	87.6%	92.9%	94.2%
500万円以上	91.4%	89.0%	94.1%

ずいそう

毎日「うどん」を食べる町

映画「UDON」を見て、初めて知った。讃岐の国・香川県には900軒ものうどん屋があり、毎日朝からうどんを食べる、学校給食にもしょっちゅううどんメニューがある、とにかく「うどん王国」なのだということ。ために各市のホームページを覗くと、独立した「うどん店紹介」のページがどこにも当然のようにある。

近年の「さぬきうどん」ブームなどが起こるずっと前から、香川県民はうどんを日々の生活の友としてきたのである。そういえばずいぶん前に、鈴鹿のある「さぬきうどん」の店の主人が、「麺は毎日、讃岐から宅急便で送ってきている」と言うのを聞いて、感心したことがあった。

生活に根ざした食文化、体にしみ込んだ味覚

讃岐人は、大阪人が「たこ焼き」をつまむような感覚で、おやつのようにうどんを食べる。うどん屋の店も、路地の角に目立たずに開いている。近所の人々がちょっと通りがかりに立ち寄るので、派手な看板もない。

待てよ、こんな風景、憶えがあるぞ。そうだ、わが町にもあったじゃないか。街角の「どら焼き」「鯛焼き」の店。夏だけ開く「かき氷屋」さん。学校前の小さな「やきそば・お好み焼き」店。高校の帰り道、「ナカノの餅」を腹に入れてから家まで自転車をこいだこと。

学生生活を送った静岡の町では、あちこちの店先に串ざしの「おでん」がダシの中に浮いていた。はじめは妙な感じだったが、慣れると違和感もなくなった。静岡の「おでん」は、讃岐の「うどん」に匹敵するものだったのか。その土地ではあって当たり前の風景が、よそ者にはびっくりするほどの異文化体験になるものだ。

今は「どら焼き」も「たこ焼き」も「おでん」も、みんなコンビニに取り込まれてしまった。でもかつての店と決定的に違うところは、店番の話好きのおばちゃんがないこと。「いらっしやいませ」のセリフしか言わないコンビニの店員と、世間話はできない。

その点では、さぬきうどんは旧態依然のあり方をしっかり守っていて、エライと思う。これからも変わらないでいてほしい。